「日々の理科」(第 1602 号)　2018 (H30),11,27

「ケヤキくるくる（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

ケヤキは観察対象として教材性が高いと思う。関東平野や武蔵野台地を代表する落葉高木であること、四季の変化が明瞭なこと、それに、種子の拡散の方法が独特なことなどがあげられる。

ケヤキの葉は、関東に住む者なら誰でも知っているが、果実や種子の姿を知る者は少ないだろう。色も形状も地味で、あまり目立たないからだ。

これが、熟したケヤキの果実である。互生の葉の「葉脇」に１個づつ仲良く並んでいる。実はこの果実の中に種子があるのだが、果実は熟しても開かない。これを「非裂開果（ひれっかいか)」といい、ケヤキ独特の果実の形態だ。

大学構内にもケヤキの大木が何本かあって、今の時期、大量の落葉が舞う。ケヤキの木の真下には、葉が単独で落ちたものが多い。しかし、少し幹から離れると、単独の葉よりも、小枝に何枚かの葉をつけた状態で落ちているものが多くなる。

その枝には、ほとんど例外なく、葉と一緒に果実がいくつかついている。それでも地味な姿なので、子どもたちには説明しないと、なかなか気づかない。実はこれこそケヤキの知恵「ケヤキくるくる」のメカニズムなのだ。

落葉期のケヤキの樹下で観察していると、単独の葉もたくさん落ちてくるが、小枝と数枚の葉が一緒に落ちてくる様子がわかる。それも、くるくる回りながら、遠くに飛んでいくから面白い。葉一枚だけだと真下に落ちる。果実だけだと遠くには飛べない。しかし、このように小枝一体だと、遠くまで飛べるのである。